

双川理事長の度胸と決断

私が挨拶に立ち寄ったところ、「東京へ行つたら八重洲口のところに八島輝徳（大正十二年卒、中国天津市柔道界育ての親）が居る。引き上げて自動車修理工場をやつているので必ず訪ねなさい」と紹介された。

勿論、八島大先輩と会つた時の話題は「繩田はどうしているか」という言葉の裏から「何とかして柔道部を復活できないものか」という話ばかりであった。その時初めて、大学の柔道部の復活が禁止されているということを知つたのである。

しかし幸いなことに、柔道部の先輩としては満州帰りの小田明道先輩（明大理事会に關係、のちの葉山三郎総監督同期）と、かつて私が三船久蔵先生（明大、東京高等商船、海軍経理学校など多くの師範、講道館十段）の家で生活を共にし、指導を受けた斎藤雅夫先輩（柔道部主将、明大体育専任講師、六段）がすぐ身近かな東京に居てくれたお陰で、早速当時の理事長双川さん（東京出身）に直接お会いできる段取りを整えてくれた。

しかし、先輩たちも私も内心は「とても実現は難しいのではないか？」と思っていた。

だが、いざ私が会つてみると、さすが名横綱双葉山を少年の頃、大分の漁村で見出し、爾来

育ての親となつたという人だけあって、柔道部復活に大賛成、「しっかりとやつて下さい、マツカーサー司令部のG H Qから文句が起きた時は私が一切の責任を持つ」とハッキリ言つていた。だいたのには感服してしまつた。

そうは言つていただいたものの、やはり大学

当局や双川理事長に迷惑をかけては申訳ないと想い、いざというときには柔道着の上衣と帯をすればやく脱ぎすぐ、「ジャパニーズレスリング」ということでその場をぐぐりぬけようということにした。

また柔道部の復活ではあるが、道場の看板には私の手で「柔道クラブ」と墨黒々と書いたのを想いだす。

しかし、玄関を中心に、その周辺には赤旗が林立し、鉄柵という鉄柵には学生の自治を訴える大きなステッカーが貼りめぐらされるといつたさくばくたる状態。空手部の旧柔道場も荒れ放題に荒れていた。それを四人で大学側のおばさんたち二人に手伝つて貰いながら、昔の道場に戻すには並大抵のことではなく、かれこれ一週間ばかりかかった。

その甲斐もあつて、一ヶ月もたたないうちに部員も二十名程度に増え、一応の形を整えることができた。

勿論、四人を除けばほとんどが白帯の連中ばかりである。しかし、全くの初心者は一人もおらず、その点教えるのに案外楽だった。

やつと一人前に成長

やがて年を越し、二十二（一九四七）年の新学期が始まると、拓大から転校してきた金谷久君（当時四段）、天津で八島大先輩の指導を受けた宮崎博通君（福岡県豊国中学出身で九州柔

歴史と伝統の上に立つた先輩たちの熱い情熱が、双川理事長に切れ味のよい決断をもたらせたと言つても過言ではあるまい。（中略）

（東京は戦災で焼野ヶ原であつたが）それ程ひどくなく、大学の本館も幸いに昔のままの姿であった。

結局は大正時代からの永く輝かしい柔道部の

道界で勇名を馳せた青年、当時四段（らが入部、さらにこれまでの部員の中にも講道館で昇段し、黒帯を締めるようになった者も出てきて、りっぱな一人前の柔道クラブに成長していた。

さらに翌年には三船先生の弟子である田中先生の紹介で、よく私と講道館で練習をしていた伊藤信夫君（卒業後、東京ガスに就職、産業人東西対抗東軍監督）が入学、伊藤君は当時三段で慶大の羽鳥さん（当時六段）から盛んに慶大入学を勧められていたが、田中先生と私の勧めが実つて明治に入り、やがて柔道部を背負つて立つスター的存在になつた。

また、この年には齊藤先輩の後輩である隠居忠夫君（当時三段、卒業後広島で自動車販売業）も入つてきて、早、慶、日など各大学から道場と合わせて午後の練習ぶりを見学に来る始末。特に慶大OBの羽鳥さんは「どうやつて部を復活させたのか、大学から文句は出ないのか、G H Qは大丈夫か」など熱心に聞かれたが、結局、慶大は羽鳥さんが監督に就任して慶大柔道クラブを結成はしたが、道場は大学内には置けず、大学の近くの町道場に看板を掲げさせて貢つて、旗揚げしたことだった。

また早稲田も日大も、慶大同様の形でしか実現できなかつたようだ。

さらに翌年には神田和夫君（明大体育課、の

ち明柔会編集発行人）、小野寺文雄君（織維業）らが入学。

その頃、警視庁の師範をされていた曾根幸蔵先生（当時八段）から「甥の康治を引き受けてくれないか」と頼まれ、直接私から曾根君に明大受験を促したのを思い出す。

この頃、曾根君は二段であつたが、私はひそかに将来の日本柔道界を背負つて立つ青年だと期待していた。

私は当時、学生界では唯一人の五段で、講道館の東西対抗戦の（当時は初段から五段までを

大学別に分け、その中に中学生（旧制）や街の有段者を並べ、勝ち抜き戦で年に春秋一回行っていた）東軍の大将だった。

従つてまだ私も実力があつたので、曾根君が入学後はよく地下道場で練習をし、あの背の高い彼を道場の破目板にたたきつけて鍛えたものである。

曾根君は後に柔道部を背負つて立ち、二十六（一九五二）年に東京学柔連が結成されるや、

明大三連覇の偉業を成し遂げた時の選手でもあり、卒業後は監督でもあった。そしてまた後日、全日本選手権保持者として、世界にその名を轟かせた明大柔道部が誇る柔道マンであった。

この年には曾根君と共に後日やはり明大柔道部の名を馳せた門屋賢悟（柔道整復師）、大野

忠博（三重県警察本部技官）、永井藤成（整骨院経営）の三君らが入学。

さらに東京高師の柔道科から四段の金子泰興君（卒業後、新日鉄に入社）が学部三年に編入してきたので全く大きな戦力となり、明大柔道クラブは押しも押されもしないチームとなつてしまつた。

さらに一年後には卒業後新日鉄に入社、産業人柔道界の雄として誰知らぬ者もない末木茂君が入学してきたのである。

講道館での評判

こうなつては誰も「明大柔道クラブ」とは呼ばず、講道館では「明大柔道部の猛者があれだけぞりと並んでいては東軍が勝つのは当たり前」と評判になつていた。

東西対抗戦後も二年目から三年目になると古賀、山崎、宮崎、伊藤（各五段）、小野寺、

金谷、隠居、神田、金子（各四段）、青木、堀、曾根、大野、門屋、永井（各三段）、末木（一段）と明大組の名がつらなり、その下に明大と記され、この連中がそれぞれの段階で二人から三人ぐらいたび抜いてくるので、他の人たちが負け

てきても東軍が圧倒的に強く、そんな評判が生まれるのも無理はなかつた。お陰で不運？にも大将の私は三年続けて一度も汗を流すことが

なかつた。

(『明柔』)

八島輝徳先生と明大柔道俱楽部



一九五一年度卒 神田和夫

ならばレスリングとのチャンポンならよからう。G H Qにみつかつてもよいように“ジャパニーズレスリング”という名称で柔道部の事実上の発足を期してやろう」、全員がその決意で精進に精進を重ねた毎日であつた。

その頃、満州（現在の中国東北部）から引揚げられた八島輝徳先生に初めてお逢いした。八島先生は大正十二（一九二三）年卒、戦前は天津柔道会育ての親であり、明柔会の大先輩として柔道界にその名を馳せると共に、戦後は日本学生柔道連盟副会長、そして東京学生柔道連盟会長を歴任、また明柔会々長として永く重責を全うせられた大先輩であります。

当時、われわれの稽古は学生柔道禁止の中で

試合もなく、唯黙々と稽古するのみであつた。

たしかに“明大柔道俱楽部”は存在したのです。それは古い伝統と実力を有したわが明大柔道部が終戦を境にして崩壊し、敗戦と同時に学校柔道を禁止され、いつ学校柔道が復活出来るかと、夢見つづ永い悲惨な期間を占領軍の目をかすめて唯々稽古のみに明け暮れた時代、これが“明大柔道俱楽部”的時代だったのです。

“今までこそ、学生柔道は追放の憂きめをみているが、必らず柔道は世界のスポーツとして発展し、その中心は学生によつて握られ、学生柔道は再び盛況を見るに至る”との確信と決意に満ちていた。「そうだ、柔道部が許されない

稽古のあとの慰労をしてくれたものである。

われわれにとつてこの先輩がたの行為はすべて柔道クラブ発展へのエネルギーにつながつていった。

やがてこのクラブに、年を追つてぞくぞくと新鋭が集まり、わが明大柔道俱楽部は愈々自他共に許す実力を築くに至つた。勿論、実力を試すところは水道橋の講道館だけである。われわれクラブ員は機会あるごとに月例や紅白、段別試合に出場し、その名を大いに轟かせたものである。やがて昭和二十四（一九四九）年、明大柔道俱楽部として初の広島、九州遠征が企画された。八島先生を始め多くの先輩の並々ならぬ努力により実現できたのである。

ちなみにこの第一回広島、九州遠征のメンバーリストは、古賀監督、堀口、金谷、隠居、伊藤、金子、神田、宮崎、小野寺、曾根、末木、門屋、大野の二三名であった。この後、二十五（一九五〇）年は第二回大阪、広島、九州遠征、二十六（一九五二）年の第三回は姿監督引率のもとに東北、北海道遠征と、多くの先輩のご尽力によつて毎年実地されたのである。

やがて昭和二十六（一九五一）年に東京学生柔道連盟が結成され、学生柔道が晴れて復活し、その名、明治大学柔道部として部長出し屋、そして居酒屋へとわれわれを連れ出し、

口林次郎、監督葉山三郎、師範姿節雄のスタッ

フで出発、俄然他校の追従を許さぬ強さを發揮したが、その礎ともなった数多くの先輩が優勝の夢をたくしながら学生柔道禁止のうちに学窓を巣立ち、社会に出ていった。これが今日の伝統の糧となり、まさに破竹の進撃が始まったのである。

（『明柔』）



葉山先生への想い

一九五四年度卒 渡辺政雄

毎日でした。
入学前、講道館で自分なりに猛練習に励んだつもりだったが、力の差をつくづく思い知られた。従つて周りを気にするほどの余裕も無く、また、当時の葉山先生は私にとっては雲の上の存在であり、道場での挨拶が言葉を交わす唯一の機会でした。

先生は大学の体育課に勤務されており、午後三時からの練習には必ず見えられました。師範席に座して泰然自若、終始無言、技術的な指導も口やかましい説教もありませんでしたが、先生が道場に居るだけで緊張感がみなぎり、練習に熱が入った事だけは今でも記憶に鮮明に残っています。

先生の体から発する情熱がこうさせたのでしょうか、今でもあの雰囲気は不思議でなりません。

先生はどの部員にも偏見を持たず、部員に対して不満があつても總て自分で受け止め、他人にもらすようなことをしませんでした。

在学四年の間、一度も部員に対する批判的な言葉を聞きませんでした。授業に出ない、試験を受けない部員を教室まで連れて行き、着席を確認して職場に戻った事もありました。

先生は寡黙でしたので、日常の行為、行動から教えられる事が多かつたのですが、一度だけ

言葉をかけられた記憶があります。

昭和二十九（一九五四）年の秋、就職のお願いで体育課に伺つた時（だつたと思う）、政君（在学中、同期に渡辺欣嗣君がおりましたので「欣」、「政」と呼ばれていた）、眞面目にやつておれば何時かは報われるものです」と言われ、この言葉を大切に今日までやつて参りました。

昨年（一九〇〇四年）、アテネ・オリンピック金メダリスト阿武教子選手が後輩に贈つた言葉、「努力は人を裏切らない」を新聞記事で目にした時、ふと半世紀前の先生の言葉を思い出し、懐かしく感じたものです。

私は、先生が一番信頼していたのは神永君だと思っております。

私の卒業間もない昭和三十三（一九五八）年の全日本学生柔道優勝大会決勝戦にそれを見ました。

「明大」対「天理大」零対一で明大の敗戦色濃い大将戦、神永君は膝の故障にもめげず、天理の古賀選手に優勢勝ちし、代表戦になりました。

神永君がこれ以上試合を続ける事は誰の眼から見ても不可能に見えました。チーム監督は渡辺欣嗣君だったと思いますが、思いあまって伝令を飛ばし、葉山先生に指示を仰ぐ。

先生は何のためらいもなく、「神永君」の一

私は昭和二十六（一九五一）年に入学し、柔道部に入りましたが、それは入学後、少なくとも夏休み過ぎの頃ではなかつたかと思います。当時、柔道部の体制は、葉山監督、姿師範、金子主将、曾根道場取締、大野、門屋、永井、末木の諸先輩がおり、新入生の私にとつて、道場（当時は本校地下にあった）は恐怖と地獄の

言、あとは何も言わず、試合場を見据えていた。「片足でも立てる限り神永……」、心中そう思つておられたと思います。

信する者に總てを託し、天命を待つ……。

先生の思いが神永君に通じたのであろう、まさに奇跡、神永君は見事な大外返しで古賀選手を破り、明大が優勝しました。見る者に感動を与えた一戦であり、あの様な感動的名勝負にその後出合つていません。

神永君は昭和二十九（一九五四）年秋の講道館紅白試合で初段で十九人を抜き、抜群の成績で即日三段に昇格した翌日、地下道場に訪ねて来ました。その時、葉山先生から第一番に声をかけられ神永君の相手をしたのが私です。これが縁で入学後も親しみを感じ、付き合いが深くなりました。日本の柔道界を代表する人物と親しく交誼出来たのも先生の引合させと感謝しています。

昭和二十九年秋、就職先を決める時期になり、同期生が次々と決まるのに私一人が決まらず、不安の日々を送っていた時、先生自ら日本鋼管に出向かれ、試験を受ける事が出来ました。何とか入社が決まりましたが、こんな経緯でしたので、入社後はただただ先生の顔に泥を塗らぬ

よう勧めに励みました。お陰様で大過小過を克服して無事、サラリーマン生活を送ることができました。就職が決まった時のホットした気持ちを強くしたのもこの時です。

私の今日あるのは、人格形成の一一番大切な時期に柔道部に籍を置き、厳しい練習に耐え、葉山先生、姿師範の指導を受けた事が總てであり、「人生」は人との巡り合わせでその良し悪しが決まるものと痛感しております。

（明柔）

無事、河辺さんとともに合格通知を受け、春三月、田渕先生のご紹介で渋谷区三軒茶屋の佐藤金之助先生（九段）の道場にお世話になつた。（先生は戦前、昭和の天覧試合等で勇名を馳せ、第一回東西対抗に東軍の主将として出場された。田渕先生は学生時代この道場で師範代を務めておられた）

都内でも有名な道場で稽古相手にも恵まれ、環境は申し分なかつた。そのうち、道場の都合で他に寄宿先を捜さねばならない事情ができて困惑しているとき、姿先生にご相談したところ、種々ご配慮いただき、またとなない好条件の第一歩（姿寮）を踏み出すことができた。

姿先生との出会い

昭和二十六（一九五二）年四月、私が福岡県小倉市に在住中に柔道を指導していただいた恩

師田渕先生の推薦を得て、同門の河辺さんと二人で明大受験に上京したときが姿先生との初対面でした。

当時、明大の柔道部は金子、神田、曾根、諸先輩等名だたるメンバーが揃つており、その諸先輩を相手に稽古を付けておられたのが姿先生でした。

道場全体に籠つた気迫とその雰囲気に一瞬戸惑を覚え、これは大変なところにきたと云うのが正直な気持ちでした。



姿寮の発足

一九五四年度卒 岩崎 勇

姿寮の発足

門前)の歴とした一軒家で、河辺さんと二人には十分な広さでした。

この寮は当時、中山競馬場で調教師をしておられた鈴木信大郎さんの所有で、姿先生が無理を云われお世話いただいた経緯があります。

寮のスタートに当たり姿先生から特別な指示等

全くなく、河辺さんと二人の自主性に任されていました。

在寮中は競馬場場内に新設された柔道場で月、水、金、の週三日間、競馬場関係者に柔道を指導する楽しみがあつた(競馬場々内の柔道場は中山競馬場が初めてで、道場開きのときには姿先生の恩師三船十段が出席され、古式の形を披露された)。

当時、先輩ともども部員一同、先生のご好意で競馬場のアルバイトをしていた。

開催日は土・日・祝日で、条件としては最高の待遇を得ていた。これも姿先生のご配慮があつたものと感謝しております。これに反し、私どもの勤務状態はあまり褒められたものでなく、姿先生にご迷惑ばかりお掛けしたようです。姿寮は競馬場正門前と云うことで、諸先輩の休息場所となり、出勤後も引きつづき定時までお休みの先輩もおられた? 何時だったか、たまたま姿先生の目に留まり諸先輩の戸惑いと慌てようはいまだに脳裏に鮮明に残つております。

姿先生宅の一室に戦前の天覧試合・六段の部・優勝の勇姿とともに、その横に「精力善

す。そのとき先生が一言“ウン、チエー”と云われ、立去られたのが印象的でした。

その後、特別寮生として、柔道部としては珍しくも白帯の塙見さん、松岡さんと狭いながらも仲間が増え、充実した学生生活を送ることができました。

姿寮はその後、先生の高潔な人格を慕つて入寮者も増加の一途を辿り、目黒の合宿所の完成期に閉鎖されるまでつづきました。

今、振り返るに、姿寮での経験がその人の人格形成に大いに影響し、役立ち、その後の社会人としての活躍を見ればそれは判然としています。

結びに

人間にはその生涯に人生の節目となる転機が数多くあります。私の場合、小倉での田渕先生との出会い、姿先生との出会いが一番大きく影響していると思います。

昭和三十四(一九五九)年春、明大柔道部の姿節雄師範は、私財を投じて一軒の中古住宅を入手された。

目的は明大柔道部に入部する者のうち、友人、知人、先輩、後輩等から東京での後見を依頼された学生の便宜をはかるためだつた。当時はまだ東京の住宅事情は殊更に悪く、入部する部員も多数で、目黒の合宿所には全員入所できるスペースはなかつた。

それに経済面でも脆弱な学生が多かつた。

場所は船橋市小栗原町、国鉄(当時)下総中山駅から徒歩五分ほどの住宅街の一角に位置していた。木造平屋建て、八、六、三畳の和室と

用・自他共栄」、講道館創設者嘉納治五郎先生の色紙が飾つてあります。

姿先生の柔道の基本理念は正しく「精力善用・自他共栄」であり、柔道部の師範だけではなく、全日本柔道発展のためにその精神を生涯貫かれ実践されました。

(明柔)

姿寮で学ぶ

一九六二年度卒 栗原英道

台所、便所、それに洗濯物干し場に使える庭がある三十数坪の敷地にあった。

同年六月、改装なつた家屋は「姿寮」と名付けられて、立花敏明、大村至（いずれも昭和三十四年）OBほか小生も含めて七名が入寮した。

同年秋、三畳の和室と六床の段ベッドが増築され、最大十二名の入寮が可能となる。寮費は全員月四千円。三千円が食費で千円は寮の保全管理費として先生のもとに持参した。

便所は外部を利用する（汲み取り式なので費用節約のため）、寮内歩行は静かにと、寮生互いに牽制しながらの生活だったが、真っ先に置下の根太が折れたりして建物の損傷は激しく、度々修理がなされた。先生の負担は多大であつたはずで、今思い出しても心が痛む。

朝夕二回の食事は自炊で、一年生が担当。稽古が終わると素早くシャワーを浴びて帰途につく。駅前の商店街で必要な材料を仕入れて持ち帰り、調理にかかる。

米屋、魚屋、肉屋、豆腐屋、乾物屋等々、いざこでも先生の名前は知られており、「姿さん」とこの学生さん」と呼ばれて、随分贔屓にしてもらつた。

なかでも最初に訪れる駅前の岡野精肉店の親父さんと息子さん（通称は「若大将」で政経学部OB）にはお世話になつた。優勝でもすると、

親父さんは顔をクシャクシャにして喜んでくれたし、日頃は寡黙な若大将も莞爾とした笑顔で「ヨーシ！」と声をかけてくれた。

注文はいつも「豚コマ」（豚肉の切れ端）である。「豚コマ」が大量に出るようでは店の採算は良くない。それでも我々の注文量に足りない時は「並肉」を格下げしてドカンと增量のサービスがあつた。

寮の昼間は全員が出払つていつも留守になるので、主要な郵便物は先生のお宅で受け取つてもらつた。連絡係担当の二年生以上が、稽古からの帰途、毎日交代で訪問してこれを受け取つた。寮での日課は、月曜から金曜までは、起床後トレーニング、調理朝食、授業、稽古、買い出し、調理夕食、就寝と、自炊のほかは合宿所や澄水園とほとんど変わらない生活だった。

昭和二十年代、中央競馬会では騎手の落馬事故が多発した。その対策として騎手に柔道の受身を習得させることになり、昭和二十七（一九五二）年、中央競馬会としては初めて中山競馬場場内に柔道場が新設され、先生がその指導にあたられた。

この事の少し前に、理由あつて「唄」のなくなつた岩崎勇、河辺一彦（いずれも昭和二十九年）OBは、先生の尽力により借り上げてもらった中山競馬場正門前の鈴木信太郎調教師所有の一軒家に入居した。昭和二十六（一九五二）年十月の出来事で、これが「姿寮」のルーツとなる。その後乞われて中山競馬場通用門脇にあつた守衛詰所兼宿泊所に転居して警備面で貢献した。

昭和三十年代に入つて世情が安定してくるとその使命は薄れ、再度転居しなければならなくなつた昭和三十四（一九五九）年、先生の英断

生の格別のご配慮があつたからに違ひない。

寮での生活については先生から指示等は全くなく、在寮学生の自主性に任せられた。生活のリズムは単調ながら結構多忙で、愉快な出来事も多かつた。

先生が「姿寮」開設を決意される以前のことについては、先生や諸先輩から次の如く見聞している。

寮での日課は、月曜から金曜までは、起床後トレーニング、調理朝食、授業、稽古、買い出し、調理夕食、就寝と、自炊のほかは合宿所や澄水園とほとんど変わらない生活だった。

昭和三十年代に入つて世情が安定してくるとその使命は薄れ、再度転居しなければならなくなつた昭和三十四（一九五九）年、先生の英断

で「姿寮」の開設に至つたのである。

しかし、昭和四十年代、日本は高度成長期を迎えて学生の経済事情も好転し、学生の気質も急速に変化した。入試も一段と難しくなつて、新入部員も激減した。先生はこれ等諸般の状況を熟慮勘案されて、昭和四十九（一九七四）年三月末に「姿寮」閉鎖を決断された。

「姿寮」OBは五十五名、大半は立派な社会人となつた。

小生は学生時代以来、多くの人から「姿寮」について、いろいろな質問をいただいたが、一貫して「姿寮」は「塾」ですと答えてきた。

「塾」は創設者的人格、識見、技量等の全てを、直接間接に享受習得しつつ自己研鑽を行う場として、いつの時代でも大きな存在意義があつた。

明治維新の大業を成した賢偉の人々は、大半が「塾」の出身である。萩の「松下村塾」しかり、先生の故郷備後神辺には、頬山陽も塾頭を務めた朱子学者菅茶山の「廉塾」があつた。大阪にも市内北浜に緒方洪庵の「適塾」が往時のたたずまいそのままに残る。

小生にとって、姿先生の背中を見ながら過ごした「姿寮」での四年間の蓄積は、その後の人全の面での「土台」となつた。



昭和36年、姿寮の学生たち

後、先生のお供をして訪れた日田市の「咸宣園」（幕末の学者広瀬淡窓の家塾、門人は最盛期三千人とも四千人ともいわれ、その盛況は九州第一といわれた）で書きとめた淡窓の漢詩を記して、「姿寮」の頃を偲び、姿先生への感謝の心とする。

道うを休めよ 他鄉苦辛多しと
同袍友あり おのづかあした
柴扉曉に出すれば 霜雪の如し
君は川流を汲め 我は薪を拾わん

（明柔）



一九五四年度卒 工藤欣一

澄水園と明大柔道部

黎明会「澄水園」は戦後間もなく設立された戦災孤児の施設で、最盛期には千名を越す孤児たちを収容していました。私は昭和二十八（一九五三）年から職員として勤務しましたが、昭和三十年の澄水園は、戦後も十年が経ち、世の中も漸く落ちつきを見せ始めた頃で、孤児たちも青年となつて実社会へ巣立つて行く時期でした。この時代の推移のなかで、園は東京都の依頼で身障者、精神薄弱児の養護にもあたることとなり、同時に母子家庭のための寮棟も併設されました。明大柔道部員の多くがここで住み込み、アルバイトをしていました。アルバイトは、学生の主な仕事は、約三百名の朝食の世話、夕食、入浴の世話を中心に、園生の生活を監督することでした。また、ともすれば卑屈になりました。

昭和四十一（一九六六）年秋、大分国体終了

ちな園児たちの刻苦心を養うには柔道が一番と
いう鵜目栄八理事長の考え方から、園内に道場を
設け、その指導にもあたりました。戦後十年を
経て世の中もだいぶ落着いてきたとはいえ、食
糧事情などはまだ悪く、そんななかで本当
によく頑張つておりました。

戦後の国の混亂期から復興、発展とともに歩
んできたこの澄水園は、昭和四十八（一九七三）
年、その社会的使命を終えたかのように閉園し
ました。明大柔道部は創設間もなくから閉園ま
で、曾根、神永はじめ多くの部員がここで生活
をさせていただきました。その数は延べ五十名
に余ります。

坂口征二、村井正芳、上野武則、須磨周司、
篠巻政利、山本祥洋、岩田久和、川口孝夫、重
松義成ら日本柔道を背負つて活躍した諸君も澄
水園組です。職員そしてまた先輩として、神永
君の昭和三十年から重松君の四十七（一九七二）
年まで、ここから駿河台へ通つた全部員を見て
きた私ですが、彼らがここで学んだことがいか
に有意義であつたか懸念をはさむ余地はあります
せん。一に柔道のみならず、その後の彼らの社
会での活躍を見るにつけ、その思いを深めてお
ります。その意味で、我々にこのような場を与
えてくださった鵜目先生に改めて敬意を表す次
第です。

（明柔）

鵜目のオヤジさんと澄水園

一九五八年度卒 神永昭夫

「オレも男だついてこい。たとえ茨の道じや
とて、決して苦労はかけやせぬ。オレの腕で泣
いて見な……」めつたに唱わないオヤジさん
が優勝の宴席で唱う歌である。

私がオヤジさんは豪放にして磊落、巨体からしほ
りだすような声で唸つた。

会つたのは昭和三十（一九五五）年四月。明大
入学間もないある日だった。本館地下の道場で

稽古中、葉山監督に呼ばれ、「この方が君のア
ルバイト先のボスだ」と紹介された。その時に
交わした言葉は、「君はヤル気があるのか、や
る氣があるのなら澄水園のオレのところへ来
い！」「……お願いします」これだけだった。
その日の夜、浦和の自宅を訪ね、福祉施設
「澄水園」のこと、氏の柔道に対する考え方などについて種々聞かせていただいた。私は諄諄
と説かれるその語り口に暖かい人間味を感じ
と同時に、爽快な男らしい思想に、すっかり魅
了されてしまつた。

敗戦直後、昭和二十年代前半の社会はまだ混

乱状態にあり、国民は耐乏生活を強いられて
いた。東京では空襲で家を焼かれ、家族を失つた
戦災孤児が大勢、上野の山や国電の地下道で浮
浪生活を送っていた。中には靴磨きや物売りで浮
稼いでいる者もいたが、多くはルンペンや搔扒
いをして飢を凌いでいたのである。

国や都は民間とタイアップして彼らを収容す
る更生施設を各地に建設した。

しかし、浮浪生活に慣れた孤児たちは仲々施
設になじむことが出来ず、逃げ出すものが多く
つたという。彼らを描いた「鐘の鳴る丘」とい
う連続ラジオドラマや同名の映画シリーズを覚
えている人もいるだろう。

さて、その施設の一つが鵜目栄八氏が理事長
を務める黎明会「澄水園」であった。赤羽に建
てられた澄水園には最盛期千名に近い孤児たち
が収容されていたが、社会が落着くにしたがい、
更生、卒園して漸減していく。それでも私が
いたものである。またこの頃には孤児とは別に
心身の障害者と母子寮の施設も併設されてい
た。私はこの澄水園に入學以来約三年間お世話
になり、柔道部の主将に推された四年生になつ
て合宿所に移つた。

三年間、博愛精神に乏しい、一アルバイト学
生としての生活だったが、不運にもめげず頑張



澄水園事務所前で。左端が鶴目栄八氏、その右が筆者（昭和30年）

つて いる園児たちから逆に多くの事を学んだ。

後日、様々なピンチに立った時、私になつて いた障害児たちの笑顔が不思議と思ひ出され、勇気をふるい起こしたものである。

さて、オヤジさんの母校は法政である。しかし、学生時代の柔道仲間にはむしろ明治勢が多く、とくに葉山三郎、小田原徳善、宮川周蔵の各氏とは親交が深かつた。

そんな関係で現役の部員たちがお世話になつた訳だが、オヤジさん自身も明大柔道部の気風

を愛し、物心両面の協力を惜しまれなかつた。

私は戦後、明大柔道部再建の恩人の一人だと思つて いる。

澄水園でアルバイトをした第一号は昭和二十二

三（一九四八）年入学の曾根さんで、以来約二十年間、毎年何人かがお世話になつて いた。一

方で食糧難の合宿に米を届けてくれたり、病人やケガ人が出ると園に併設されていた診療所で治療してくれる（タダ同然で）。なかには道場と関係のないところで病気に罹つた不とどき者

もいて、それらにまで当時貴重品だったペニシ

リンを注射して治してくれたものだつた。保険の制度が不備で医療費が非常に高い時代だつた

から本当にありがたい事だつた。

学生の澄水園での生活について書いて見る。

起床五時、飯炊き、配膳、食器洗い。園児たちの食事中にランニング、登校、夜、園児柔道部の指導、入浴の世話、宿直。授業のない時や休日は園内外の掃除や整理、当時燃料だつた石炭ガラの搬出入などであつたが、結構仕事は次から次とあつた。しかし、普段昼間は学校に行かせてもらつて いるのだから皆頑張つた。

年中行事である運動会、海の家や遠足の付添いもやつたものである。レクリエーションの事などを話せば現在と変わらないと思われるかもしれないが、昭和三十（一九五五）年といえば、まだ戦後であり、食糧事情などもまだまで、ようやく三食食べられるようになつたといふだけのことだつた。

園の食事でいえば、飯は米、外米、人造米、麦の四種混合で、少し冷えるとボロボロで汁でもかけなければ食べられないという代物。朝はこの飯にみそ汁とつけ物だけ、昼はジャムのついたコッペパン一個、夜は朝食プラス焼魚や野菜いためなどのおかずが一品つくだけ、というわびしいものだつた。もちろん職員たちの食事

も同じである。オヤジさんの園児に接する態度

は、時に慈父であり、時に嚴父であった。園児たちは周りに対しても卑屈になりがちだつたが、社会に出た時、プライドを持つて生きていける人間を造る、これがオヤジさんのモットーだったから、種々と教育的な試みをやつていた。中でも、心身を鍛え卑屈の心を取り除くには柔道が一番と、柔道の指導には特に力を入れていた。私もこの考えに大いに共鳴し、その方針に従つて指導にあたつた。

裏話をすると、母子寮があつたことから、別れた亭主が酔つてあはれ込んでくる、また、妻子に会いたくなつて夜中こつそり堀を乗り越えてくる。些細なことで隣り同士がケンカを始め、これらをとりおさえたり仲裁したり、刃傷沙汰にあつたことさえあつた。人生の縮図を垣間見た、ということだろうか。

感じやすさがいささか残つていたあの時期、本当に生きた社会勉強をさせてくれたオヤジさんは脈々として我々に伝わり、明大柔道部スピリットの一端を担つてゐる。

（『明柔』'82・上）

白雲寮と久米勝先生

『明柔』編集部

白雲寮は一般学生の寮で、正式には柔道部の合宿所ではなかつた事を先ずことわつておかねばなるまい。しかし、昭和二十四（一九四九）年に柔道部助監督の久米勝先生が寮監に就任してから、ボツボツと柔道部員の寮生が増えだし、

二十九、三十、三十一年辺りには寮生の大半が柔道部員ということになつた。これは久米先生の才覚によるものだが、大学も柔道部員も明大生なのだから特におかまいなしの態度だつた。良き時代の話である。

白雲寮も戦後しばらくは食糧事情が悪く、寮生は自炊生活で、後輩たちは朝、江戸川べりのランニングが終わつてからが忙しかつた。二十

九（一九五四）年から賄い付きとなつたが、自炊時代の食糧の調達、食事作りの苦労話には事欠かない。

さて、久米先生は佐賀県は神崎の人、佐賀モ・ンらしい朴訥で気くばりを忘れない人柄は多くの人に愛された。日頃は無口な方だつたが、寡黙なユーモアとでもいうか、ユーモアのセンスはお持ちだつた。

ある日の朝、ランニングから戻つて見ると先

切菖蒲園の近くに在つた。建物は老舗の料亭だった「弁松」を大学が買いとつたものであるから、中庭に池のある粹で落ち着いた二階屋であつた。七、八部屋であつたろうか、広さは様々だつたが趣があつた。このような住環境の中では、二十名前後の部員たちは先生御夫妻の薰陶よろしきを得て和氣藹々、のびのびと生活させていた。ただいた。

また、近隣の皆さんも下町らしい飾らぬ雰囲気で学生たちを見守つてくれた。

生が池を見つめながら考え事をされていた。

たずねると「この池にすでに百匹以上の金魚を放したのだが、さっぱり見あたらない、逃げ道もあるのか知らん」ということだった。当時は池に鯉を飼える時代ではなかつたが、先生が時折金魚を放しているのは我々も知っていた。

先生は池中に金魚が逃げ出す水路ありと断定し、日曜日に池ざらいをすることに決まった。

さて、その日曜日、バケツをいくつも用意して全部員による池のくみ出しが始まつた。小さいとはいえ池である、半日かけて漸く底地が見えてきた時、誰かが「アレはなんだ！」と叫んだ。池のドロの中に五十センチもある魚状のものが二匹動いているではないか。魚にくわしい部員がいて「先生、あれは雷魚ですよ！台湾ドジョウですよ。アレが金魚を全部食つてしまつたのだ！誰が池に入れたのだろう？」

池に雷魚を放つたのは、ほかならぬ先生だったのである。何年か前、地震封じのマジナイにナマズの子を二匹池に放つたこと、これがナマズではなかつたのである（雷魚は蛙まで食べてしまう）。あの時の情景と先生の苦笑いがいまだに思い出される。

我々がニクイ奴ですから食つてしまいましょうというと、また魚の通が「これには虫がいますから食べない方がいい。しかし、韓国の人

大好物にしています」という。先生はそれを聞いて大きなバケツに魚を入れ、近くに住む韓国の友人に届けたものである。まことに先生らしい話ではないか。

終わりにこの白雲寮に寄宿した部員名を列記する。

(二十三年度) 古賀愛人。(三十一年) 石橋毅次郎。(三十一年) 安達秀則、本間竜吉、新井重之、五島光、波多江健一、山崎富士雄。(三十二年) 永井佑治、野田健次郎、藤井洋一、塚本勝人、齊藤信明、久永峻、中田健次、黒川(河添) 茂、新谷進、伊藤賢次郎、横惠。(三十三年) 鈴木実、富賀見真典、児玉良一郎、小林敏邦、湯浅久雄、高島正美、浜野宏哉、坂本行弘、比嘉良幸。(三十四年) 谷藤義明、柿崎甫。ほかに短期間ではあつたが、曾根康治、神永昭夫も寄宿した。

八幡山合宿所の思い出

一九八七年度卒 飛松秀樹



八幡山合宿所は、昭和五十五（一九八〇）年（平成九（一九九七）年までの十二年間、明大柔道部の合宿所として、東京都世田谷区八幡山に存在いたしておりました。私が在籍させていたいたのはそのちょうど中間の時期ではないかと思います。合宿所は京王線の八幡山の駅から田畠がある住宅地を通り、徒歩十五分くらいだつたと思います。

合宿所は当時、明大ラグビー部監督の北島先生宅の隣で、プレハブ式一階建ての建物でした。一階に玄関・食堂・風呂・トイレ・八畳の和室が一部屋。二階に十一畳の和室が一部屋、八畳の和室が三部屋で、広めの五LDKといったところだつたでしょうか。

私は昭和五十九（一九八四）年四月一日から

の新入生として、見習い期間を兼ね、同年の三月二十日頃に、同期とともに合宿所に入りました。私は、世田谷学園（講道学舎）から初めて明治大学へ進学いたしました。明大柔道部八幡山合宿所へお世話になる日の朝には、講道学舎の横地治男先生に玄関まで見送られ、「名門・明治大学で団体戦のレギュラーになりなさい！」

明治大学で団体戦のレギュラーになれれば一人前です」と激励されたことを今でも覚えております。しかし、当時身長一六八センチ、体重六十三キロ位の軽量級の私が、明治大学で団体戦のレギュラーになれるのだろうか？と思つておりました。因に私以後、学舎出身者がほぼ毎年明治に進学するようになり、その活躍ぶりは知られているところです。

私が一年生の時は、監督が篠巻政利先生、助監督は上村春樹先生でした。一学年八〇十二名ほどの部員数で、四年生まで含めて約四十名位の部員数だったと思います。八幡山と目黒の二箇所に合宿所が存在しておりましたので、約半分の二十名程が八幡山合宿所で生活をしておりました。私の同期は十二名で、半分の六名、藤鷹英雄（明大中野）、渡辺英明（明大中野）、向井一輝（鹿児島実業）、那須一郎（九州学院）、古田勝久（中京高校）、私が八幡山合宿所になりました。また、当時、八幡山合宿所には、寮

監として藤原敬夫先輩がおられ、トレーニング面・生活面でのご指導をいただきました。

目黒合宿所では、橋本年弘（延岡学園）、中口光一郎（都城商業）、工藤貞康（明大中野）、本間一義（明大中野）、辻純一（崇徳高校）、早田 豊（小城高校）が生活をすることになりました。

明治大学柔道部で強くなりたい！ という気持ちと、俺は明治大学柔道部でやつていけるのだろうか？ という不安を抱きながら、八幡山合宿所の生活がスタートしました。当時の先輩方

方は、日田先輩（和歌山北高校）、青野先輩（早鞆高校）等、軽量級ながら怖くて豪快な先輩や、野寄先輩（嘉穂高校）、長谷川先輩（天理高校）など、柔道の強さでは全国的にも名前の知れた先輩たちばかりでした。八幡山の合宿所では、諸先輩方に柔道面では勿論のこと、私生活の面でもご指導をいただきました。世間知らずの私たちに、先輩・後輩のあり方や社会ルールを徹底的に教えていただいた場所でもありました。しかし、それは後に私が社会人となつたときに本当に必要なことであり、大切なことであった事を痛感いたしました。今となつては大変感謝いたします。

八幡山合宿所は、明大ラグビー部のグラウンドとは道を挟んですぐ前に建てられておりまし

たので、朝のトレーニングは毎朝六時より、ラグビー部のグラウンドで行つております。トレーニングのメニューは決まっておりませんでしたが、スパイク跡のデコボコのグラウンドを十周ほど走り、百メートルダッシュを五本～十本、腕立て、アヒル歩き、兎跳び、懸垂などで、一時間ほどのメニューが多かつたように思いました。トレーニングは真剣で、いつも先輩方の厳しい檄が飛んできました。

私は、二年生からレギュラーに入ることが出来ました。二年生になると、厳しかった一年生の仕事から解放されて、やつと八幡山の合宿所生活にも慣れてきました。三年生になると、篠巻先生が退任され、監督に上村春樹先生、助監督は原吉実先生の体制となりました。助監督に就任された原先生は、熱血漢で情熱にあふれる先生でしたので、それまで学生の自主性に任せられた篠巻先生や上村先生の指導方法とは対照的でした。私を含め、他の学生も最初は戸惑いを感じておりましたが、次第に原先生の気持ち、感じました。私を含め、他の学生も最初は戸惑いを感じました。しかし、それは後に私が社会人となつたときに本当に必要なことであり、大切なことであった事を痛感いたしました。今となつては大変感謝いたします。

八幡山合宿所は、明大ラグビー部のグラウンドとは道を挟んですぐ前に建てられておりました。少人数の部員数、狭い道場、決して優れた選

手ばかりではない当時の明治大学柔道部でしたが、輝かしい栄光を築き上げ、名門明治大学柔道部を作り上げられた諸先生方・諸先輩方の功績を何とか途切れさせずに出来たのは、原先生の情熱があつたからではないかと思います。

私は、四年間で学生生活を終えることが出来ず、五年生を経験いたしました。一年生の時にレギュラーに入ることが出来ませんでしたので、五年生となつても団体戦の試合に出ることが出来ました。八幡山の合宿所にも、ただ一人五年生として生活をさせていただきました。当時は恥ずかしさもありましたが、今となつてはこの五年生として出場した団体戦の試合が一番の思い出になつております。

私が五年生の時のレギュラーには、一年生に吉田秀彦、岡部善隆、二年生に石田輝也、三年生に小川直也、四年生に天本文雄、五年生に私等となつておりました。小川直也は既に学生チャンピオンになつておりましたし、石田輝也も前評判通り、二年生でかなり頭角を現しておりました。吉田秀彦は一年生ながら全日本選手権に出場しておりました。原先生も、この年はひょっとしたら優勝できるかも知れない?といふ気持ちがあつたのではないかと思ひます。それ、レギュラー全員が八幡山の合宿所で生活をしておりましたが、夏頃より原先生も八幡山

合宿所での泊まり込みをされるようになつたからです。朝のトレーニング、午後の道場での稽古、夏休みの午前・午後の二回稽古など、原先生はとにかく私たち学生に付きつきりで指導されました。稽古が終わり、八幡山の合宿所に帰つても原先生がおられたのではきついものがありましたが…。

団体戦の結果は、諸先生方・諸先輩方の期待に応えることが出来ず、準決勝で天理大学に惜敗しました。しかし、この時の団体戦の試合には監督、助監督、学生の気持ちが一丸となつて臨めていたと確信しております。これが後に明治大学柔道部が十九年ぶりの王座奪回を成し遂げた事へつながつたと思つております。

私の明治大学柔道部時代の思い出の半分は八幡山合宿所での生活になります。苦楽と共にすごることで一生涯の親友(同期)を得られることが出来た、今は跡形もありませんが、八幡山合宿所での生活は、青春時代の大きな思い出と、社会人としての人生の基礎を創つていただいた場でした。

明治大学柔道部にお世話になれたことで、姿師範や神永先生、また多くの偉大な諸先生方のご指導を受けることが出来た事を幸運に思い、誇りに思つております。その思いを次の後輩たちにも伝えていきたいと思つております。

目黒合宿所の思い出

一九五五年度卒 小林 昇

私が目黒合宿所に入ったのは昭和二十七(一九五二)年の春であった。その玄関は一寸したお屋敷の風格を備えており、明大の黄金時代にふさわしく、いかにも若き獅子たちの住む殿堂の様にも見えた。

私のスタイルは、リュックに登山帽、黒い上着にあみ上げ靴であつた。要するに「山出し」そのものであつたというのである。事実その通りであつたのである。その上、当時の私は都会の空気を刷新するものは地方人の野性であると自負し、大道狭しとかつ歩していたのであつた。態度が大きければ大きいほど、田舎者である私は都会に馴れた上級生から見るとむしろ滑稽であったのだろう。

当時の写真を見ると、まるで明治初期の軍人さんが着用している礼服の様に肋骨が浮彫りされて、痩身にして陰険な自分に驚きあきれるばかりである。私たちはいわば空腹をかかえての柔道修行であり、腹一杯食えることが当時最高の偉業であつた。最近の様に物質が豊富になると精神的なプラスアルファがないと本物

でないなどと主張されるが、価値観は環境によつて大きく変化するものだと言いたい。ともあれ、私たちは物の豊かでない時代に精一杯生き抜いてきたのであつた。

学校の方はともかく、毎日合宿所から道場に通つた。それこそ森に鳥の鳴かない日はあっても道場には出た。道場では必ず姿先生の胸をお借りした。私は当面の重点目標を寝技におき、遮二無二先生にぶつかつていつたが、全く手も足も出ない毎日であつた。

先生のお得意技は何だつたか忘れてしまつたが、私の場合は袈裟固めで抑えられて、先生の額から落ちる大粒の汗をたっぷり顔面にいただいた。この記憶は今日に至るもなお新しく甦り、時々高校生などを相手に稽古している時にもふと思いつては苦笑する事がある。私は円熟期に入られ、人間的にも練られた先生のお人柄をこの肌で感じながら、精一杯稽古できることは何よりも偉せなことであつたと思つてゐる。

しかし、上級生との稽古は、先生の胸をお借りする時の様な、いわば師範対弟子の甘えは寸時も持たせてもらえなかつた。上級生は皆一様に鬼の様であつたともいつても過言ではなかつた。一癖も二癖もある強豪が面白押しに並んでいた。誰と稽古しても真剣勝負の様に激しいも

のであつた。

中でもSSSさんの強引な大外刈りには幾度も泣かされた。おまけに弱い者いじめとも思えるほど執拗に背後から首をねらつて送り襟締めに攻撃される時ほど辛いことはなかつた。稽古を怠けて無届で休もうものなら、翌日の稽古は大変なものであつた。人によつては日に五、六回は落とされた。明大の稽古は技を伸ばすのではなく技を縮めるものだともいわれ、私たちは他人には語らなかつたが、「人も殺す」と嘆いた。

「お前もいつかは落としてやるぞ」と、私もその予告を受けていた一人だったので、どんな稽古中にも七対三の余力を残さずには安心出来なかつた。無我夢中に練習できたらどんなに爽快であろうとしばしば思つた。

しかし、初めての夏休みが近づいた頃から、精神的にタフになつて逆にこちらから攻撃に回ると先輩にも意外な死角があつて、ここを攻めたらやれるなど気がついた。こうして初めて、先輩からの責め苦から解放された。現にその攻撃の手をはね返すことが出来るようになつてしまつた。思えば長い間泣かされてきただけに、その時のうれしさは涙のともなうものだつた。

千葉県は茂原での強化合宿を無事にすませて、私は初めて郷里の土を踏んだ。早速病床の母を見舞うと、床の中から白い手をさしのべて

私の顔にふれ、「こんな顔に産んだ覚えはない」と本気になつて私を叱つた。東京へ行つた友人は皆スマートになつて帰つてきているのに、傷だらけになつて帰つてくるとは親不孝者である

というのだ。私は致し方なくこの傷は柔道で落とされるのが嫌で、必死に逃げたとのものでないこと、それが毎日続いて出血してひどくなつた。治療しても治るいとまがないので止むを得ないと説明した。道場でどんなに「しき」を受けても弱音を吐かなかつたつもりであるが、この時ばかりは柔道に対する後悔を感じなかつたと言えば嘘になると思つた。

しかし、上京して再び道場に通いだすと、すべての事は忘れて稽古に身をいれる事が出来た。後年SSSさんのあの様な「しき」は禅の世界で言う「愛情」などと自問自答し、同時にあの「うらみを嗣ぐ」教育があつたればこそ、一寸やそつとの事ではへこたれない人間になれただのではないかと思つた。

「人情に流されていては真に鍛えることは出来ないと悟り徹底的にしごく。狂気に近い激しいものではあるが、相手からうらまれなければ開眼させることは不可能と信じて断じて行なう、眞の愛情のそれでなくてなんであろう」

私はこのあたりに明大の伝統があるのでないかと思つた。

道場で鬼と言われた先輩たちも合宿所ではた

だの人であった。SSSさんの如きは無類の好人物でさえあった。私たちは意外な一面を垣間見

て、お芝居なのではないかと疑った話がある。地震の時の御大はトイレからペーパー片手にノーパンで飛び出してくる人であったし、私たちがいたずらに柱にかけた人工的な震動にも確実におつたまげて駆け出して行く始末であつた。

小田先生は私がクラレ、当時の倉敷レイヨンに入社するため、まさにお別れして合宿所の門を出ようとした時、「良いことは知らせなくて結構、しかし悪いことは早く知らせてくるように」とおっしゃつた。

私の様な山出し人間が伝統的に重厚堅実な織維会社に二十有余年勤め、永年勤続表彰を受け出来たのは、一重に先生の御高恩によるものである。

溢れたものであつた。

私は学問よりも柔道一筋に生きることの方に価値をおいた。

その事に少しも後悔していない。むしろ良か

つたとさえ思っている。実社会に出てから学問の遅れをとり戻したいと思い、努力したことはあつたが、それは必要に迫られてその都度やつても結構間に合うものであることを知つた。人間を鍛える面に於いても、いつでもやってやれないことは無いと信ずるが、真に鍛え込むといふことになると、人の一生の内の、それも青年期のごく限られた期間を除いては、効果から見て問題があるよう思う。

私たちはその良き期間に、重ねて良き師、良き先輩、良き友に恵まれた。これは大変幸せなことであつたと、心から感謝している。

(『明柔』)



目黒・合宿所の思い出

一九六一年度卒 松本順吉

山手線日暮駅下車、駅前よりバスに乗つて、元競馬場前駅で下り、住宅街を突き当りまで歩いて右折し、数軒先の最初の路地の角地に合宿所があつた。やや高台にあり、木造の普通の家であつたが柔道部合宿所の大きな看板が重々しく感じられ、初めての合宿所訪問に緊張した事を思い出した。

目黒の合宿所には昭和三十三(一九五八)年四月より一年間お世話をした。当時、合宿所には十七名の部員が起居していたと記憶しているが、四年生には湯浅久雄、富賀見真典、小林健児、坂本行弘、高島正美先輩等がおられ、一年生のそれも新入生の眼から見れば大人であり、スケールも大きく、豪傑だなどの印象を受け、これは大変な所へ入ったと思つた。この年

四年間の合宿生活は、私にとって生涯忘れ難い青春の日々であった。それは一度と帰らぬものだけに、尊くも又美しいものとなつて、その後の生活の心の糧になってきた。生活そのものはあまりスマートな内容とは言い難く、むしろ野蛮であったと思う。しかし、野性と真実味に

度の同期生は佐藤治、佐藤栄吾、木下征彦君等であり、同期の合宿所育ちとして、気持ちの通じ合う仲間意識を持つている。

さて、小生が寝起きたのは二階の奥の部屋で湯浅先輩が部屋頭であり、三年生は伊藤豪先輩、二年生は本村正中先輩の四人部屋で、寝相が悪いとか、イビキがうるさいとか、ご指導を受け乍ら一年間を過ごした。

一年生の日々を振りかえって見ると、月曜日から土曜日までは朝六時からのトレーニング、目黒不動までのランニングと路上でのバーベル等を使った筋力アップのトレーニングであり、それから明大前の学校に通い、午後は駿河台の道場での練習に励み、少し早めに合宿所に戻つて食堂で夕食をセット、あとはフトンをして寝て一日が終つた。当時の楽しみと言えば土曜日の夜と日曜日であったが新宿や渋谷へ出かけ映画を見たり、はやりのジャズバンドの演奏を聞いたりして楽しんだ。

しかし、月に一度は日曜当番があり、この日は木下君と組んで夕食を用意した。おかげで飯の炊き方、味噌汁のつくり方、そして、キャベツのきざみ方まで覚える事が出来た。

これ等の日常生活以外で思い出すことは、全日本学生柔道優勝大会の優勝祝賀会である。神永キャプテンを中心とする最強メンバーで順当

に勝ち進み優勝した。この優勝祝賀会は合宿所の一階、三部屋のフスマを取りはずして行われた。そしてこの祝賀会終了後は二次会、三次会で合宿所が空になつた。

次は目黒不動の夏まつりである。真夏に冬のドテラを着て、黒帯をしめて、おまけに長ゲツをはいておまいりしたと思う。先輩の命令には絶対服従であり、格好が悪いと思い乍らも群集心理でいつの間にか盛り上つて楽しんだ気がする。

近くの市島道場へも遊びにゆき、柔道をとつた事もあつた。当時、道場の若先生には親切にしてもらつた。

又、亡くなれた坂本、高島先輩には土曜日の夜など、目黒のトリスバーへよび出され、はやりのハイボールなどをごちそうになり、お酒の飲み方をおそわつた。しかし、柔道と同じで、お酒も強くなれなかつたのは残念である。

長年の歴史と色々な思い出をつくつたあの目黒の合宿所が取りこわされ、近代的な合宿所に生まれかわる。新しい合宿所が出来てしまえば、もう昔の歴史や思い出もなくなつてしまふようと思えるが、新しい合宿所には新しい歴史や思い出こそ似合うと思う。

後輩の皆さんに新しい歴史をつくつてもらいたいものです。

(『明柔』'94・F)



